

## アナログコミュニケーション アートプロジェクトの可能性

花澤 洋太 | Yota HANAZAWA

現在、私たちを取り巻く環境はインターネット普及に伴い瞬時に様々な情報を手にいれることが出来るようになった。反面、コピー情報の過多、多様性ゆえにオリジナルの情報を見つけ難くなっている。また通信手段に関してもほぼ全ての学生が電子メール、SMSなど直接対面ではないコミュニケーションに比重が置かれている。それらは非常に便利な面も有り、私自身も活用しますが、一つのツールでしかない。

美術大学の学生にとっては様々な表現、発信、コミュニケーションの方法があるが、今回のアートプロジェクトは直接対面でのディスカッション、コミュニケーションを通して生まれる様々な関係をつなぎ合わせる必要がある。またワークショップでは企画者、参加者、共に集合体(グループ)の中に身を置き他者、環境、素材と向き合う必要性が生じる。その環境は現在の自己を確認できるオリジナルな場の創出となる。

### 1. はじめに

教養ゼミは全学1年生を対象に平成22年度から農芸クラス、ワークショップクラスに分かれ行われている。各クラスは様々な学部、学科、コースによって構成された。平成23年度ワークショップクラス担当教員はディレクターの6名(吉賀、松村、川西、青山、屋代、花澤)は芸術学部、デザイン工学部から選出された。各教員の制作、研究内容は様々ですが共通している研究活動、Key Wordを挙げるならば「コミュニケーション」、各クラスは学生数約50名を教員+ファシリテーター2名の3名体制で2コマ続き16週の授業である。ファシリテーターは本学卒業後、学外で活躍し、ファシ

リテート能力を有すると思われる若い人材を選出した。

平成23年度、花澤クラスの河北町総合交流センターサハトベに花におけるアートプロジェクト、ワークショップ活動を考察する。

### 2. 授業概要

花澤ゼミの教員体制は私(花澤)、ファシリテーター/青木(高校非常勤講師)、須藤(山形まなび館MONOスクール勤務)の3名で行う。50名の学生を25名ずつ青木クラス、須藤クラスに割り振り、各ファシリテーターの主体性を尊重して学生とのコミュニケーションを深めた。私は両クラスの授業に参加し計画、運営、把握を行う。授業内容は大きく前期、中期、後期と分け1~4週までは京都造形芸術大学で考案されたワークショップテキスト「1day kyokasyo」の中から4つのワークショップを選び実施した。

授業初日のワークショップは「ライフライン」各自、画用紙に時間経過を横軸にして、これまでの自分の人生を図で表現、その後発表。2週目のワークショップは「何でもコピーライティング」日常生活における何気ないモノ、風景を撮影して言葉を付ける制作。3週目は「紙ばしら」大量の廃棄紙を使い接着素材を使わずに造形美と高さを競うグループ制作。[写真1-1、1-2] 4週目は「パターン」身の回りにある様々な物を集めて並べることで見える新たなおもしろさを発見した。

行ったワークショップには一日完結型の個人制作、グループ制作があり制作、発表を通して学生間のコミュニケーション能力向上に努めた。

そして5週目からは河北町総合交流センターサハトベに花におけるアートプロジェクトは始動した。主な内容はワークショップ企画、準備、フライヤー、缶バッジ制作を行い8週目(6/21)河北町サハトベに花でのワークショップ、展示を行なう。後期はワークショップの振り返り、ポートフォリオ制作、ワークショップで制作した作品とポートフォリオの展示を本学7Fギャラリーにおいて開催した。

### 3. アートプロジェクト、ワークショップ開催の経緯

サハトベに花を使つての活動の話は本学大学院修士、ごとうひとみさん(河北町勤務/アートコーディネーター)からサハトベに花の活用の相談を受けた。当初は学生の作品展示企画などを考えていたが、私は従来の展示企画形式には興味は無く、制作者、鑑賞者の境の無い、両者が共につくる環境、展示を行いたいと思い「にぎわいの場」「べに花」をキーワードにアートプロジェクトを提案した。そして幼児100名を対象に10:00~11:00の時間で出来るワークショップの企画を行う。河北町、サハトベに花の職員の方々も提案に賛成してもらい実施が決定した。ただし提案したワークショップ内容は私が以前行った内容であり、本企画は学生と共に「にぎわいの場」「べに花」を基に構築する条件を付け、サハトベに花プロジェクトがスタートした。

### 4. コミュニティー形成

授業開始から4週間の個人、グループの創作活動を通した一日型ワークショップ体験は、学生間、ファシリテーターの関係を良くすることに重点を置いた。特に4週目に行なった「紙ばしら」のグループワークショップ(接着素材を使わずグループごとに廃棄紙を重ねて高さ、造形性を競う。終了後はグループごとにコンセプトの発表。)はディスカッション、共同作業が多くグループ内のコミュニティー形成が強化された。



[写真1-1]



[写真1-2]

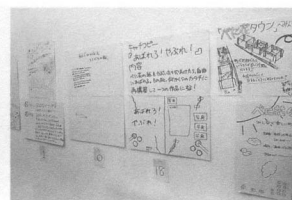
### 5. アートプロジェクト企画

今回プロジェクトは河北町、サハトベに花館の有効活用であり従来の作品展示ではなく、いかに地域の方々と学生の創作活動を通した場の共有、もの作りが目的である。

5週目の授業からプロジェクトはスタート。はじめに事前に私がサハトベに花で打ち合わせに撮った写真をプロジェクターで鑑賞して施設環境、概要を確認した。その後、「にぎわいの場」「べに花」をテーマに「紙ばしら」ワークショップの5名×10グループで企画会議を行う。決める内容はプロジェクトタイトル、ワークショップ内容、A4フライヤーデザインである。各グループ2枚のボードに制作して10グループ、10案の発表を行う。その後、学生の投票によってプロジェクトおよびワークショップ内容は決定した。様々なアイデアが提案されたが、投票集計結果「あばれろ、やぶれ!~べに花ペーパーに描こう~」に決定した。[写真2-1、2-2]



[写真2-1]



[写真2-2]

ワークショップの内容は、あらかじめ学生によって紅花で着色された大量の障子紙を参加者があばれて破く。子ども

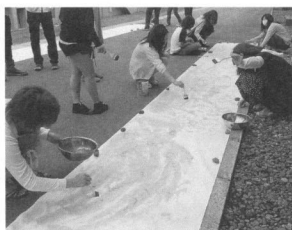
達の日常生活、教育現場において、あばれたり破いたりする活動はタブーだが、開放的なサハトベに花野外広場の環境と多数の学生が参加する事で可能にした企画である。

#### 企画内容

- ①参加者はあらかじめ紅花で着色した障子紙を思う存分に破く。
- ②破かれて出来たさまざまな形、大きさの紙にクレヨンを使って描く。絵を描く際、ほとんどの場合四角い画面に描きますが描かれるイメージは無意識に画面(フレーム)との関係でつくられる。破かれた様々なフレームから新たなイメージが誘発される。
- ③出来上がった各自の絵をつなぎ合わせる事で各自の絵は全体に融合され個人のイメージとは異なった一体感を発見する。また展示の際、貼付ける30mの透明ビニールシートには予め学生達のドローイングが描かれている。こども達の描いた絵の集合体と芸工学生達のドローイングの融合はコラボレーション(共同制作)となる。
- ④展示

## 6. 準備

内容決定後は準備グループとフライヤー、缶バッヂデザイン制作グループにわけて作業を進行。まず準備グループは障子紙を支持体とした大量(60m)の紅花ペーパー作りを行う。紅花から紅色を取り出す際に大量の黄色の染料が出るのでその黄色い染料を使用しての紅花ペーパー作り作業。[写真3-1]当日のシミュレーションを行う。[写真3-2]



[写真3-1]



[写真3-2]

フライヤー、缶バッヂデザイン制作グループはデザインのデジタル化、データ入稿。[写真3-3]紅花ペーパー作り、データ入稿には総合美術コースのステューデントアシスタントと協力して作業を行う。



[写真3-3]



[写真3-4]

私の作業は全体把握、スケジュール管理、広報、交渉です。授業時間は毎週木曜日9:00~11:30、授業時間内で移動、準備、実施、展示までを行うタイトなスケジュールなので万全な事前準備[写真3-4]、スケジュール管理を行った。サハトベに花までは大学からの所要時間は車で約45分。移動方法はバス二台をチャーターして移動する事に決定した。行きは二台とも朝8:30大学発、サハトベに花からの帰りの便は12:30からの授業のある学生もあるので一台はワークショップ終了後11:30に出発、もう一台は展示作業まで行い14:00からの授業に間に合うようバス運行も時間差運行で調整した。

## 7. ワークショップ当日(2012 6/21)

当日、心配していた天気は曇り、大学を一人の遅刻もなく予定通り8:30に出発。[写真4-1]サハトベに花には予定通り9:15到着。到着後はすぐに会場設営開始、短い時間での準備作業はファシリテーター、ワークショップ経験の豊かなステューデントアシスタントの的確な指示でスムーズに行われた。[写真4-2、4-3] 9:30からは河北町、広報誌の掲載、協力また大学ホームページでの広報もあり150名の幼児とプレスの方々が続々と訪れた。[写真4-4]





[写真4-1]



[写真4-2]



[写真4-3]



[写真4-4]



[写真4-5]

10:00いよいよワークショップスタート、学生、参加幼児、保育士、プレス関係者あわせると250名。まずはワークショップ説明、導入。ほぼ全ての学生にとって大勢の人の前で活動説明は初めての経験となった。導入担当の学生はリーダーを中心に具体的に素材を提示しながら、グループで説明を行う。[写真4-5]

導入は非常にわかりやすく参加者は活動内容を理解して皆、環境、素材に興味を持ち集中して創作活動がスタートした。

創作活動が始まると用意した紅花ペーパー(60m)はワークショップタイトル通り、開始から間もなくするとあばれて破かれた。[写真4-6]破かれた、紅花ペーパーは様々なフレームを持ち参加者は様々なフレームから誘発された思いのイメージをクレヨンで描いた。[写真4-7、4-8]

今回の活動は50名の学生が参加する事で学生と子どもの関係構築も多様ですが参加者は創作活動を通した

会話、寄り添う視線から新たなイメージを発見した。学生、参加者共に他者を通しての自己認識、イメージ増幅の獲得、体験である。特に学生達の日常は効率化を優先した制度、システム、時間軸のルーティンにいる。アナログ異年齢交流はインターネット、SMS世界における自己中心的、一方的なコミュニケーションは通用しない。参加者、学生は様々な直接的な接触スタイルを通して他者理解を思考する機会となった。[写真4-9、4-10]



[写真4-6]



[写真4-7]



[写真4-8]



[写真4-9]



[写真4-10]

中盤では各々の制作が終わると予め学生達がコミュニケーションをテーマにマジックを使用して描いたビニールシートに張り込む作業。薄めたボンドを刷毛で張り込み作業は自然に学生と会話を行ないながら協同活動が生まれた。[写真4-11]

終盤、30mの透明ビニールシートに150名の様々なフ

レーム、紅花イエローから誘発された作品と学生の描いたドローイングがつながりました。個人の作品は全体に吸収され新たな構造となり巨大な作品に変化した。[写真4-12]



[写真4-11]



[写真4-12]



[写真4-13]

最後は鑑賞。遠距離での鑑賞後は近距離での鑑賞。まず子ども達は画面に駆け寄り自分たちの身長より大きくなっ

た画面に驚き、自分の描いた場所を探す。探す行為の過程には他者の作品鑑賞が含まれ、自分の作品を見つけた後に、自分の作品とつながった周辺の作品鑑賞が生まれる。学生、参加者は各々、つながることで生まれる新たなストーリーの書き換えを体験した。[写真4-13]



[写真4-14]



[写真4-15]



[写真4-16]



[写真4-17]

観賞後は全員で会場の片付け。子ども達は学生達の指示に従って遊び感覚で紙片を集め、[写真4-14]片付け後は記念撮影をして学生達にお礼を言って終了した。[写真4-15]12:30から授業のある学生達は早帰りのバスで大学に向かった。

残った学生は展示作業。30mの作品は展示スペース、ガラス面に設置され透過光の中で鑑賞する事が出来る。学生達も展示作業を行ないながら子ども達が行った鑑賞と同じように自分達の描いたビニールシートのドローイングを探し、その上にレイヤーされた子ども達の作品との一体感から新たなイメージを獲得した。[写真4-16、4-17]

展示作業終了、6/22(金)~7/4(水)まで河北町サハトベに花館にて展示。[写真4-18、4-19]

予定通り遅帰りのバスで大学に到着、ワークショップは無事に完全終了。ワークショップ活動はYBC、TUY各局の夕方のニュースで放映、また山形新聞[写真4-20]、読売新聞[写真4-21]、河北新報[写真4-22]にも掲載された。



[写真4-18]



[写真4-19]



紅花ペーパーやぶって お絵描き

河北町特産の紅花で染めた黄色に染まった障子紙を破り、その紙に子どもたちが絵を描いて一つの作品を作るといふ一風変わったイベントが21日、同町谷地所岡の町総合交流センター「サハトベに花」で開かれた写真。

「あはれろ!!やぶれ!!」紅花ペーパーに描こう」と題し、山形市の東北芸術工科大学の学生が企画した。町内の幼稚園や保育所などに通う子どもたち約50人が参加。子どもたちは会場に用意された幅約1.5m、長さ約6mの障子紙10枚を豪快に破り、クラクションや自動車など、好きな絵を思い思いに描いた。その後、絵は幅約2m、長さ約30mの透明なビニールシートに次々に張り付けられ、大きな作品が完成した。

[写真4-21] 2012 6/22 読売新聞

紅花ペーパーをちぎってアート

河北町特産の紅花で染色した紙を破りアート作品を仕上げるイベント「あはれろ!!やぶれ!!紅花ペーパーに描こう」が21日、同町のサハトベに花で開かれ、町



完成した作品の中から自分の描いた絵を探す園児

[写真4-20] 2012 6/26 山形新聞



◇：散らしてみているのはトレットペーパーではなく障子紙。子どもたちが、思いっきり破った後の光景だ。

◇：東北芸術工科大学(山形市)の学生が、山形県河北町で幼稚園児らと楽しんだ創作活動の一場面。名付けて「あはれろ!!やぶれ!!」。子どもたちは自由に破いた紙に好きな絵を描き、貼り合わせて大きな作品を完成させた。

◇：型に一切はまらない細断的な仕上がりで、アートを学ぶ人の上をいつてるかもと子どもたちも真顔で感心していた。(山形)

[写真4-22] 2012 7/19 河北新報

8. 大学での展示

ワークショップ後の授業は記録写真、ビデオを見ながらの振り返りを行う。またサハトベに花での展示終了後、本館7階ギャラリーにおいて全てのワークショップクラスの発表展示「2012年度 教養ゼミ ワorkshopクラス—美大の教養!?!—」展に向けた展示プランのディスカッションを行う。学生達の等身大ポートフォリオを支柱に30mの作品を展示するプランである。等身大ポートフォリオとは今までの授業で使った素材、感想など現在の自分をダンボールの支



持体に表現する自画像課題。全ての学生達は一週目に行なったライフライン(自己紹介)で制作した作品とは大きく変わり、自身の活動を通して獲得した達成感、コミュニケーション力を使い主体的、自由に制作が行なわれた。そして30mの作品と一体化したインスタレーション展示となった。[写真5-1、5-2]また当日の記録映像、音楽作品を制作する大学院生TAによって編集、今までの記録映像ではなく作品化された映像を会場で放映した。[写真5-3]



[写真5-1]



[写真5-2]



[写真5-3]

## 9. アートプロジェクト考察

16週の授業で行ったワークショップには様々な関係から生まれる創作、環境が存在した。今回、受講した学生達は今後、美大学生としては個人の「自己を掘り下げる創作」制作活動を行う。現代において、私達を取り巻く環境は劣化した情報の多い社会である。創作活動を持続することは、常にオリジナルを生み出しアイデンティティーを維持、獲得し続ける努力が必要。その為には常に直接、素材と対峙した制作活動を通しての自己形成、深化は必須である。また現在

の芸術、表現活動、アイデンティティー獲得方法は多様であり「他者との関係性から生まれる創作」も存在しています。今回の活動は様々な個人、グループにおける対面の活動はインターネットの世界における匿名アバターによる仮想コミュニケーションとは全く異なる体験である。

アートプロジェクト、ワークショップが従来の個人の制作活動と大きく異なる点は制作者、鑑賞者と明確な境界が無く共に参加したメンバーで創られる点である。また様々な規制、企画側の思考があり具体的に行動を起こす際にはグループで話しあい協働作業が伴う。それらの過程では意見の相違、合意の差異から「多視点における考える環境」が生まれる。学生達は多くの他者とコミュニケーションを通して具体化されるイメージを獲得し、アートプロジェクトにおいて個人制作、発表活動では得ることの出来ない体験をする。

これら一連の活動を通して他者、自己理解を深め「差別なき思考」「オリジナルの判断力」を獲得し、閉じた社会を新たに切り開く人材になる事を希望する。

最後になりますが教員体制は二人のファシリテーター青木さん、須藤さんはチームティーチングする事で50名の学生と密接にコミュニケーションすることが出来、信頼関係を築いた。今回の短期間における大規模なプロジェクト企画、実施にあたって総合美術コース非常勤 作田先生、チューデントアシスタント総合美術コース学生 粟野さん、菅原さんは学生の先輩として信頼関係を短時間で築き要所所での確かな指示を行った。また大学院TA(M1マルヤム)は動画での記録、編集作業を行う。またアートコーディネーター、本学卒業生ごとうひとみさん、河北町の方々との連絡、調整業務にも感謝します。私自身、今回のプロジェクトにおいて様々な新たな出会い、関係構築を通して自己形成深化と具体化されるイメージを獲得した。

[執筆者]

花澤 洋太

Yota HANAZAWA

芸術学部 美術科

Department of Fine Arts, School of Art

准教授

Associate Professor